

Charles Dickens (1812-70)

Great Expectations (1860-61)

第 6 回 Vol. II, Chapters I~IV (pp. pp. 163-196)

Vol II に入る前に、Vol. I について、メモ 2 点。

メモ 1 【「囚人」「足枷」「やすり」「窃盗」「罪」「嘘」等への言及】

1. 幼い Pip、逃亡中の囚人に脅され、Joe の鍛冶場から「やすり」、姉の食糧庫から「パイ等」盗む。この「窃盗行為」を、親しい Joe にも明かせず、罪意識を引きずる。
2. Miss Havisham を初訪問した後、Pumblechook や姉にその様子を問われ、嘘で塗り固めて報告。Joe には、虚偽であると、後に明かすが。
3. ある日、バブに Joe を迎えに行き、「やすり」をちらつかせる、謎の男に出会う（彼からの贈物＝高価な紙幣）
4. Satis House の階段で、「弁護士 Jaggers」と後に判明する奇妙な紳士とすれ違う。同日、青白い若い紳士にボクシングを挑まれ、負傷させる→ズボンに彼の血痕が残り、警察に逮捕される恐怖に怯える。
6. 鍛冶屋の徒弟となって初めて半日休暇とり、Miss Havisham を訪問。その夜、Wopsle に誘われ、Pumblechook 宅で劇を朗読、殺人犯の役を担う。同夜、Mrs. Joe が何者かに頭を強打され重傷を負う。現場に残された証拠品＝囚人の足枷（かつて Pip を脅した逃亡中の囚人が、やすりを用い、切り離した足枷）
7. バブで Wopsle が「殺人事件」の新聞記事を声高に読む最中、Jaggers（再）登場。
【Vol. I には、このように囚人、足枷、やすり、罪、嘘、暴力、殺人、等々――丸で何かの暗号であるかのように――散りばめられている】

メモ 2 【Pip が抱える、もう一つの「罪意識」＝Joe に対する裏切り】

1. 幼少の頃から姉に暴言・暴力振るわれる自分を、「仲間・相棒」と労わり、かばい、今日に至るまで、愛してくれる Joe。
2. Miss Havisham 宅で美しい少女 Estella に会い、gentleman 世界に憧れ、逆に、鍛冶職人 Joe を「恥じ入る」ようになった自分。
3. その Joe を遂に「見捨て」、ロンドンで紳士教育を受けるべく、嬉々として「家を出る」自分。

Volume II

【Chapter I】(pp. 163~171) London, 丸で「犯罪」の町であるかのよう。

1. 四頭立て駅馬車に 5 時間ほど乗り、終着駅 London、Cheapside に到着（注によると、Dickens 自身、London へ初めて来た際、到着したのが Cheapside）
2. 当時のイギリス人、「自国のもの＝最上」と心得――さもなければ、London を“rather ugly, crooked, narrow and dirty”と思っただろう、と。

3. Jagers の事務所 Little Britain. “just out of Smithfield, and close by the coach-office.”
4. Pip、hackney coach で事務所へ。御者、Jagers の怖さをよく知る様子。ボッタクリな
どせず、そそくさと去る。
5. Jagers、不在。Pip を Jagers の部屋へ案内した事務員、そこで新聞読む男に「出てい
け」と不躰に。
6. その部屋: “a most dismal place”. 天窓から見えるのは: “distorted adjoining houses
looking as if they had twisted themselves to peep down at me through it.”
7. 奇妙な置物ばかり: “an old rusty pistol, a sword in a scabbard……two dreadful casts, of
faces peculiarly swollen, and twitchy about the nose.”
8. 事務員: “had the same air of knowing something to everybody else’s disadvantage, as his
master had.”
10. Jagers 不在の為、Pip 外出。Smithfield→St. Paul’s→Newgate Prison へ（またもや
監獄！）門衛、中庭など案内→絞首台や鞭打ちの場等々。引用① p. 166, 2 行目～段
落最後まで。
11. Jagers 未だ帰らず、再度外出→Bartholomew Close。Jagers を待つ人々。耳に入る言
葉: 「Jagers なら大丈夫」、「Jagers が付いてる、それ以上望めない」、「他の弁護士な
ど要らぬ、Jagers でなければ」等々: “These testimonies to the popularity of my guardian
made a deep impression on me, and I admired and wondered more than ever.”
12. Jagers 登場。皆が彼を囲むが……何を言われても、「金を Wemmick に払ったか？」
等と確認するのみ。付きまとう者には、「弁護、引き受けないぞ」と脅したり、無視した
り。「金に糸目つけぬ、従兄の弁護を」と喚き散らすユダヤ人には、「最早遅し。相手側
の弁護引き受けた」と。Jagers, 畏怖の対象。
13. Pip, Jagers と事務所へ。剛腕ぶり: 引用② p. 169, 上から 10 行名～次頁中程まで。
14. Jagers, 自室で立ったまま昼食（サンドイッチとシェリー）。Pip に、「Mr. Pocket の息
子の宿 Barnard’s Inn に、Pip 用のベッド運ばせたので、そこに泊まり、月曜日に、彼の
父親の所へ行き、気に入るかどうか試すように」と。
15. 依頼人から預る「多額の小遣い」を Pip に渡し、衣料品等このような業者から買うとよ
いと、色々な業者のカードも。「こうしておけば、金を使い過ぎたとき、自分にも伝わ
る。当然間違いも犯すだろうが、それは私の知ったことではない」と。
16. Barnard Inn まで、事務員 Wemmick が案内してくれることに。

【Chapter II】(pp. 171~175)

1. Pip、Wemmick を観察。引用③ p. 171, 最初の段落。四角い「板」のような顔、「えく
ぼ」とは呼べぬ幾つもの窪み。シャツの様子から見て独身、喪中表す指輪多数（近親者
を何人も亡くしたか）小さく鋭い黒い眼。薄い唇。
2. Wemmick 曰く「騙す者、盗む者、殺人犯、London にも、どこにも」

3. “His mouth was such a post-office of a mouth that he had a mechanical appearance of smiling . . . it was merely a mechanical appearance, and . . . he was not smiling at all.”
4. Mr. Matthew Pocket について色々尋ねると……引用④ p. 172, 下から第二段落目～下から 7 行目迄。
5. Barnard’s Inn。想像していたような豪華なホテルではなく、ゴミゴミとした「貸部屋」ビル。引用⑤ p. 173, 第二段落 6 行目～下から第三段落目の終わりまで。
6. Wemmick が帰る際、Pip が握手求めると、その習慣忘れていた、と。日頃の彼の握手＝絞首台へ消える人と最後に。
7. 一人残された Pip, Mr. Pocket, Jr の帰宅待つ。登場した彼、何と Satis House の庭で、かつて Pip にボクシング挑んだ相手！

【Chapter III】(pp. 176~188)

1. 引用⑥ p. 176, 第 1 段落～第 2 段落終わりまで。人の良さそうな、勘違い多い相手。
2. 「青白い紳士」Herbert Pocket、あの日、Miss Havisham の「遺産相続人+Estella の婿」の候補として、Satis House に招かれていたとのこと。
3. 選ばれず、「落胆したのは」と Pip が言う、と、“*She’s a Tartar.*”と。引用⑦ p. 177, 第一段落。[Herbert は Estella を明確に把握しているのだ]
4. 事実色々判明。Estella=Miss Havisham の養女。Jaggers=Miss Havisham の顧問弁護士。Matthew Pocket (Herbert の父親) =Miss Havisham の従兄
5. Pip が抱く Herbert の印象。引用⑧ p. 177, 最後の段落～次頁第三段落終わり迄。
6. Herbert、“Harmonious Blacksmith”の作曲家に因み、Pip を「Handel」と呼びたい。
7. Herbert が「Pip 資金」用い、コーヒーハウスに注文した食事到着。豪華な祝宴。Herbert, Pip のテーブルマナー、さりげなく正す。相手思いやる優しさ、「友情」
8. Herbert、色々明かす。Miss Havisham (母親早く死亡、一人娘を甘やかす父親＝醸造業者、金持ち) → (腹違いの弟) → (父親の死)
9. Miss Havisham の熱愛した相手、金を巻き上げ、醸造所の株も。貧しい親戚、彼女に阿るばかり。その男の問題点指摘した Herbert の父親、出入り禁止に。
10. 「閉じ籠り」に至る経緯→引用⑨ p. 182, 第二段落、5 行目：“*The marriage day*”～第四段落終わりまで。騙した男、Miss Havisham の腹違いの弟と共謀。
11. 夢見る Herbert→「船舶保険関係の資本家」生命保険、貿易等々にも関心。現在、会計事務所で働き、機会伺っている、と。偉ぶる所なにもなく、すっかり親友に。
12. 夜、2 人で観劇。翌日、Westminster Abbey や公園など共に散策。
13. 所が Pip、Joe や Biddy の居る村と懸け離れた世界に身を置き、どこか空虚。
14. 月曜午前、Herbert は事務所で仕事。その間 Pip、シティ見学。彼と共に昼食「評判の店」(と呼ばれるにしては、汚れ目立つ)。その後、Hammersmith の Pocket 家へ。
15. 川を見下ろす小さな庭。子どもたち：“not growing up or being brought up, but were

tumbling up.” デッキ椅子に座る Pocket 夫人、もう一つの椅子に脚挙げ、読書。Pip 紹介され、彼女、挨拶返す: “with an appearance of amiable dignity”

16. 夫人、子どもに無関心。何度もハンカチ落とし、乳母が「7 回目ですよ！」
17. 子供 7 人。乳母 2 名。母親のスカートの下に「足置き」。子供達、ここで躓いたのだ。
18. Mr. Pocket 登場。引用⑩ p. 188, Chapter III 最後の 3 行。

【Chapter IV】(pp. 188~196)

1. Herbert と同じ笑み。自然体: “unaffected.” “there was something comic in his distraught way, as though it would have been downright ludicrous but for his own perception that it was very near being so.” 他方、夫人の対応は、“conversational condescension.”
2. 夫人の誇り: “the only daughter of a certain quite accidental deceased Knight.” (勲爵士は貴族に属さず、世襲権ないのだが) 父親、貴族との結婚前提に娘を教育。彼女、親に知らせず、Mr. Pocket と結婚。
3. Mr. Pocket が Pip を彼の部屋へ案内してくれる。下宿仲間 2 人も紹介。体格よい老けた若者 Drummle と、頭抱え、読書中の Startop。
4. 隣人 Mrs. Coiler を食事の席に「お連れする」役、Pip 担う。彼女、Mrs. Pocket に同情 (寄宿生を取らなければならないなんて……)
5. 食事中に判明。「嫌な奴」Drummle=勲爵士の跡継ぎの次—“spoke as one of the elect, and recognized Mrs. Pocket as a woman and a sister.” Pip, Herbert の辛い思い想像。
6. 召使登場、料理人が牛肉置き間違えた。Mr. Pocket の反応に Pip 驚嘆: Mr. Pocket “put his two hands into his disturbed hair, and appeared to make an extraordinary effort to lift himself up by it.” Dickens 特有のカリカチュア。
7. 食後、子どもたち (女の子 4 人と男の子 2 人+赤子) 登場。夫人、乳母に言われ、赤子を抱くが、赤子泣き出す。娘 Jane がダンスしてみせ、赤子泣き止む。一同笑う。
8. 乳母、赤子に (遊び道具となるよう) くるみ割り器渡し、退場。Jane, 危険察し、この「玩具」をそっと取る。Mrs. Pocket, 娘叱咤。妻を窘める Mr. Pocket。引用⑪ p. 194, 中程 “Good God!” ~ 次頁、第一段落終わりまで。
9. Mr. Pocket, 残された子どもたちに色々質問—“Then, he melted into parental tenderness, and gave them a shilling apiece and told them to go and play.”
10. 食後、川でボート漕ぐことに。そばで暇そうにしている競技優勝者に、Pip, 教えてもらうことに。「鍛冶屋の腕、しているね」と言われ、Pip、ビックリ。
11. 夜、“supper-tray” (夕飯) 供される。そこに、女中登場。「ご主人様にお話が」 Mrs. Pocket, 自分が蔑ろにされるのを許さず文句。だが夫, 退場。戻ってくると、台所の騒ぎを妻に伝える。妻、納得せず。引用⑫ この章の最後の二段落。

次回 *Great Expectations* 【Vol. II, Chapters V~IX】(pp. 196-231)